

追悼論稿（設立総会記念講演）

宇佐八幡宮と別符（府）

— 昭和六二年『別府史談』創刊号より —

県立芸術文化短期大学

名誉教授（故）中野 幡能

中野幡能先生の死を悼む

先生は宇佐市出身で大正五年生れ、戦時下の昭和十八年東京帝大文学部宗教学科を卒業され、戦後新設の県立芸術文化短期大学に定年まで勤められました。

生涯を通し、六世紀中葉に豊国に祀られた宇佐八幡宮の史的研究に打ち込まれ、日本歴史叢書の『宇佐宮』（吉川弘文堂）はじめ「八幡信仰史」「六郷満山」「修験道」など多くの論稿を著し、斯界の第一人者でありました。

本史談会の創立以来、顧問役として何かとご教示を頂きましたが、去る平成十四年十二月三日逝去なさいました。設立総会の記念講演を再録して深悼の意を表します。合掌

平成十六年晩秋

史談会役員一同

別府市は、往古、朝見（敵見）郷といわれていました。七世紀半ばの大化の改新（大化元年＝六四五）で律令制度が制定され、それにより豊前の国、豊後の国というものが生れました（天武二年＝六八三）。

そして国の下に「郡」、郡の中にやがて「郷」が出来ます（国・郡・郷里制、三段階の行政区画）。豊後の国には八郡が生れますが、その一つが速見の郡で、この中に〈朝見郷〉ができたわけです。その朝見郷がちょうど今日の別府市とほぼ同じ区域なのであります。

「朝見」という地名の起りには議論があり、温泉の熱い水（アタミ）という説、海人族阿曇（アズミ）説、敵を見張る地という敵見説もありますが定まっていません。

奈良時代も末期になりますと中央の政治が乱れ、各地に反乱がおこり、郡の役所を焼き払うという事件がおきるようになります。それで何とか改革せねばということで、平安時代が生れてくるわけです。そのころ、日本の思想界に「八幡信仰」というものが興りまして、国の政治や経済にまで大きな影響を与えるようになりました。そのころ、荘園制度が生れます。天皇に代わって摂政とか関白が政治を握るようになると荘園が次々とできてくるわけです。



上空よりみた宇佐神宮上宮社殿 小倉山頂上（著書『宇佐宮』より）

朝見郷の中に最初にできた荘園は「竈門荘」です。これには二説があります。その一つは、通説として天平勝宝という年に聖武天皇より、宇佐八幡の弥勒寺の僧侶を養成する経費を賄う「学分」（まかな学資の分）として与えられたというもので、墾田百町歩が寄進されたとする文書があります。ところが一説には、これが偽文書であるという説もありますが、まだこれには検討の余地があります。この頃、百町歩という墾田が朝見郷の中から弥勒寺へ寄進されたことになりました。そして、この百町歩が平安・鎌倉・室町と中世にいたるまで荘園として続きます。これが「竈門荘」であります。

宇佐八幡宮は、神宮と弥勒寺つまり「神宮寺」が一緒になったお宮で、このようにお宮とお寺が境内で共存するという考え方を最初におこしたのが宇佐八幡宮であります。そういうことで奈良時代の後期、弥勒寺という神宮寺が天平十年（七三八）に現在の境内に移ってきます。そのお宮に一番最初に寄進されたのが竈門荘ということで、竈門と宇佐八幡宮は古くから大変深い関係があったわけであります。

宇佐八幡宮の荘園には、根本神領と称する神領（神社の領地）があります。つまり、豊前・豊後、筑前・筑後、肥前の五カ国にわたって十八箇所の荘園が寄進されるほど朝廷によ

り厚く信仰されていたのであります。

その中に「石垣荘」という荘園があるわけですが、残念ながら何年何月に宇佐宮に寄進されたか判りません。この石垣荘という荘園は、宇佐宮にとりまして非常に重要な荘園であります。平安時代の末期になると、その石垣荘の人口が増加し、人々が原野や林野を開墾して耕地を広げるわけです。この耕地を「別符」、ビュウとかベフと称しました。この「符」というのは、税金を納めさせる一つの公文書で、本荘とは別の形で年貢を納めさせるためのものです。

この別符（後に別府の地名となった）は、石垣荘の枝村を指したものであります。つきつきと荘園の中から外に出て開墾して耕地を荘園に抱えこむ、これを「加納かのう」と呼んでいるわけで、いまの鉄輪の地名が加納から起ったともいわれていきます。

最後に朝見郷ですが、もともと郷というのは国家が支配する公領で、荘園がいきわたると逆に公領がどんどん狭くなります。九州の公領の総面積はだいたい百拾数万町歩といわれますが、その中に鎌倉時代終わり頃まで、宇佐八幡・弥勒寺の広大な荘園が割り込んでいきます。

一方では、大宰府の「安楽寺」（太宰府天満宮）がどんど

ん荘園を増やしていきます。それで九州の大半は宇佐八幡宮・弥勒寺と安楽寺の寺領と荘園化してしまい、残りの僅かな土地を国が公領として支配することになるわけです。

公領は、豊後国でも非常に少なくなってしまう、朝見郷では、朝見川を中心とした山の手に近い一部分が公領として残ります。しかし、これも平安時代の末期になると、この地の半分は、宇佐八幡宮の外宮の造宮のため、収穫高の半分は宇佐八幡宮に納めることになりました。これを「半不輸領ふしうりょう」といっています。このようなわけで、純然たる公領ではなくなり、宇佐八幡宮の一種の荘園になってしまふ。これで現在の別府市域はほとんどが宇佐八幡宮と結び付きをもった。とくに、石垣荘は「勅免の地」と申しまして、天皇の許可がないと動かすことが出来ないという厳しい荘園で、天皇と宇佐宮に守られた権威の高い荘園でありました。

荘園ができる、その土地の守り神として鎮守社が生れてきます。竈門荘には竈門八幡宮、石垣荘には石垣八幡宮（古くは若宮八幡宮）が鎮座しました。平安時代の終り頃、朝見郷が半不輸領として宇佐八幡宮と関連をもつようになり、と、ここにも鎮守神として八幡宮が勧請されているはず。現在の朝見八幡宮は、大友氏が鎌倉の鶴方岡八幡宮を勧請し

たという縁起になっておりますが、朝見が宇佐八幡宮に関する半不輸領ということから、あるいは宇佐から直接八幡宮を勧請したのではないかと考えられます。このあたり論議される問題でしょう。これらの八幡様は、それぞれ鎮守の神であるとともに、宇佐八幡宮による支配のための出先機関でもあるということにもなるわけです。

そうした中で、「勅免之荘」という極めて権威の高かった石垣荘で、鎌倉時代の終わりに大きな事件が起きました。元寇の役で、朝廷は綸旨（蔵人が勅命を受けて出す文書）を出して、全国の神社仏閣に「敵国降伏」の祈禱を命じました。幕府も御家人などを督励して同じく神社仏閣に祈禱を命じ、とりわけ伊勢大神宮と宇佐八幡宮には最高の礼をとり、多大の莊園を寄進して祈禱したようです。

ところが文永の役（一二七四年）の直前、大きな勢力をもって太宰府を脅かすようになった大隅国の正八幡に、幕府は大神宝を奉納するため、「勅免之地」の別なく各荘に課税や課役を負担させた。その中に石垣荘も含まれていたわけで、豊後国の守護職大友頼泰が奉行となり、何度も督促する。しかし、石垣荘では地頭代の迎西という僧が断固としてこれをはねつけた。石垣荘は「勅免之地」であり宇佐宮の若宮造宮の

課役を受けもつこと以外一切の課税・課役はご免蒙るというわけです。

大友頼泰は、正八幡大神宝官吏を伴い国府の役人とともに、朝見で人夫を徴発して石垣荘に乗りこんで来た。石垣荘では迎西が何百人という百姓を集めて立てこもり、大神宝官吏を襲い、頼泰の家来達の冠を取って投げ捨てるなど乱暴狼藉を働き、一行を追い返してしまつたというのです。

石垣荘や石垣八幡宮について、まだ判らない問題が非常に多い。石垣には大宮司・宮司という地名が残っています。やはり権威ある姿を持っていたのだなあと思います。それともう一つ、石垣八幡宮は神宮寺をかかえております。これが「円通寺」です。今は別府大学のキャンパスになっています。

かつて円通寺にはかなりの高僧がいたようで、鉄輪に一遍上人が来たことはおそらく事実でしょう。訪ねて来た最初の目的地は円通寺ではなかったろうか。この寺は当時の有識者、あるいは名僧・高僧達が続々と訪れていたと思われれます。円通寺は大友時代末期まで続きます。こんな重要な神宮寺を備えた八幡宮を擁する石垣荘は、国家権力に対して抵抗しうるだけの大きな力をもっていたと考えられます。

もう一つ、竈門八幡宮の問題がある。竈門荘は弥勒寺の最

初の荘園であることは話しました。だから、初めから神仏混淆という形式ができていただろうと思います。

現在は明治維新の時の排仏毀釈で詳しくは判りませんが、竈門八幡宮の神宮寺は非常に面白い形態をとっています。竈門八幡宮の神宮寺はとくに「六坊」といわれ、記録によると、神宮寺には神宮寺・長福寺・光明寺・自応寺・多応寺・観音寺・養徳寺で七つの寺号を持ったお寺があります。

長福寺は溝部さんのお宅として残っていますから神社のふもとにあります。光明寺は内竈にあり、多応寺は別府女子短大の東側です。多応寺という寺を詮索しておきますと、江戸時代に書かれた『豊陽古事談』という本に「羽室山多恩寺」というのが出ています。

これを訪ねると、今は、野田羽室の地を離れてコンクリートの建物にかわっている長泉寺と大変深い関係があるわけです。羽室山の多恩寺が復活されて「朱湯山長泉寺」（「別府史談」第十六号参照）に発展したのではなかるうか。この長泉寺という寺は、朝廷の信仰が厚く、皇太子の病気を癒やしたなどいろいろ権威に満ちた縁起が伝わっています。どうやら、これが多応寺と称する神宮寺の一つではなかるうか。もう一つは、亀川平田にある観音寺ではないか。この寺は、い

ろいろ縁起をかかえておりまして、大友持直が再興したと伝えられています。この観音寺も神宮寺であろうと推定しています。

竈門八幡宮の神宮寺は、六坊といいながらそれぞれの寺号を持った六つの寺があるという在り方がたいへん珍しい。それらは、それぞれ重要な荘園の名田（年貢や課役などの納入責任者の名を冠した）に建てられ、名主たちに深いかかわりを持ちながら、八幡宮の神宮寺として祭典に従事していたのではなかるうか。竈門荘に莊地を持った八幡宮が、坊（僧侶の居住区画）を各地に分散させ、「坊」と称しながら一つの独立寺院のような形を形成しながら、竈門八幡宮の祭祀に当たっている。おそらく非常に固まった在地の強力な力を示すという、神宮寺の経営をしていた非常に変わった神宮寺であったと考えられるのです。

この〈別府〉というところは、古代から宇佐八幡宮と深い関係をもつとともに、まことに何か平凡であるようで、平凡ならざるものをもった地域であった、といえましよう。

（記念講演要旨 文責大野保治）